

# ジェネリック・スキルに効果的な福祉系大学の諸活動と教育課題

## －「実習・インターンシップ」に着目して－

小口 将典（関西福祉科学大学・5253）、橋本 有理子（関西福祉科学大学・4381）、柿木 志津江（関西福祉科学大学・4238）  
吉田 初恵（関西福祉科学大学・9596）、津田 耕一（関西福祉科学大学・2231）

**研究の背景と目的** 就労環境の多様化といった社会状況のなかで、学生の多様なキャリア形成の上に社会人として活躍するために必要となる社会人基礎力を養う仕組みづくりは福祉系大学においても急務となっている。⇒本研究では、社会人に必要とされる各スキルに影響を与えると考えられる学生時代の「実習」の経験に着目し、「実習指導」や「現場実習」における今日的な課題とキャリア形成につながる指導方法について検討することを目的としている。

**研究の視点および方法** これまで、我々は「福祉マインド」に着目し、福祉系大学のキャリア形成の出口支援の重要性を指摘してきた（吉田・橋本・津田・小口・柿木2020：9）。さらに、A大学の卒業生を対象に、学生時代の諸活動と社会人スキルとの関係性から、学生時代に経験したほうがよい諸活動や今後の課題について調査を行った（調査はA大学社会福祉学科の卒業生のうち、系統抽出法により名簿から抽出した3,000名の卒業生を対象に自記式調査票を郵送して2018年11月から12月に実施。分析にはIBM SPSS Statistics 24を使用）。その結果、「実習・インターンシップ」「ボランティア活動」「アルバイト」「ゼミ活動（課外活動）」「部活（サークル活動）」は、卒業後のキャリアにおけるスキルとして大きな影響を及ぼしていることが示唆された（橋本・柿木・小口・吉田・津田2019：289-299）。本研究では、大学における諸活動と各スキルについて、「実習・インターンシップ」から「実習指導」「現場実習」における課題を考察するものである。

**倫理的配慮** 本研究は、関西福祉科学大学研究倫理審査委員会の承認を得ており（18-17）、日本社会福祉学会研究倫理規程を遵守している。なお、発表内容については共同研究者の承諾を得ている。

### 研究結果

諸活動と各スキルとの関係性（全体）

スキル 諸活動（人数）	主体性	働きかけ力	実行力	課題発見力	計画力	創造力	状況把握力	柔軟性	規律性	傾聴力	発信力	ストレスコントロール力	自己省察力
ゼミ活動（課外活動）（129）	70 (54.3)	48 (37.2)	65 (50.4)	53 (41.1)	52 (40.3)	35 (27.1)	53 (41.1)	55 (43.0)	68 (52.7)	73 (57.0)	40 (31.0)	27 (20.9)	48 (37.2)
ゼミ活動（会費や大学費）（185）	93 (50.3)	76 (41.1)	103 (55.7)	40 (21.6)	82 (44.3)	53 (28.6)	65 (35.1)	67 (36.2)	74 (40.0)	60 (32.4)	54 (29.2)	29 (15.7)	43 (23.2)
部活（サークル）活動（207）	127 (61.4)	94 (45.4)	120 (58.0)	61 (29.5)	89 (43.0)	52 (25.1)	95 (45.9)	99 (47.8)	110 (53.1)	93 (44.9)	84 (40.6)	64 (30.9)	77 (37.2)
ひとり暮らし（91）	65 (71.4)	14 (15.4)	49 (53.8)	30 (33.0)	58 (63.7)	24 (26.4)	37 (40.7)	29 (31.9)	32 (35.2)	9 (9.9)	8 (8.8)	47 (51.6)	33 (36.3)
アルバイト（321）	208 (64.8)	152 (47.4)	197 (61.4)	105 (32.7)	110 (34.3)	64 (19.9)	199 (62.0)	177 (55.1)	235 (73.2)	142 (44.2)	75 (23.4)	120 (37.4)	126 (39.3)
ボランティア活動（174）	110 (63.2)	95 (54.6)	103 (59.2)	66 (37.9)	56 (32.2)	49 (28.2)	83 (47.7)	92 (52.9)	82 (47.1)	109 (62.6)	51 (29.3)	36 (20.7)	62 (35.6)
実習・インターンシップ（164）	108 (65.9)	66 (40.2)	102 (62.2)	104 (63.4)	81 (49.7)	48 (29.3)	99 (60.4)	83 (50.6)	103 (62.8)	107 (65.2)	44 (26.8)	51 (31.1)	92 (56.1)
就職活動（252）	147 (58.3)	75 (29.8)	150 (59.5)	92 (36.5)	120 (47.6)	31 (12.3)	95 (37.7)	65 (25.8)	94 (37.3)	62 (24.6)	83 (32.9)	55 (21.8)	119 (47.2)
大学以外の資格・免許取得（151）	86 (57.0)	24 (15.9)	87 (57.6)	42 (27.8)	65 (43.0)	16 (10.6)	31 (20.5)	25 (16.6)	33 (21.9)	24 (15.9)	10 (6.6)	18 (11.9)	39 (25.8)
旅行（224）	101 (45.1)	55 (24.6)	113 (50.4)	32 (14.3)	137 (61.2)	75 (33.5)	72 (32.1)	98 (43.8)	62 (27.7)	44 (19.6)	41 (18.3)	85 (37.9)	40 (17.9)
【参考】海外留学（11）	6 (54.5)	5 (45.5)	6 (54.5)	4 (36.4)	6 (54.5)	6 (54.5)	7 (63.6)	7 (63.6)	7 (63.6)	5 (45.5)	3 (27.3)	2 (18.2)	5 (45.5)

- ・ 調査票の回収数および有効回答数は369通（回収率および有効回答率は12.7%）
- ・ 「課題発見力（63.4%）」「実行力（62.2%）」「自己省察力（56.1%）」が、他の諸活動よりも関係性があると認識されている。
- ・ 「主体性（65.9%）」「傾聴力（65.2%）」「規律性（62.8%）」「状況把握力（60.4%）」においても「実習・インターンシップ」との関係性があると認識している割合が高かった。
- ・ 「働きかけ力」に対しては、「ボランティア活動」（54.6%）よりも割合は低く（40.2%）、「ストレスコントロール力」に対しても「ひとり暮らし」（51.6%）よりも割合は低かった（31.1%）。

**考察** 実習教育は、実践の場で行われていることを学び、体験・実践するだけでなく、スーパービジョンを通して、体験による気づきを自己に統合する学習を重ねることが、結果として社会人基礎力としてのスキルの習得に影響を与えているといえる。一方で、社会人基礎力である「働きかけ力」「発信力」「創造力」「ストレスコントロール力」は実習教育において習得できる可能性があるにもかかわらず、低く認識されているのは、実習教育での学生への伝え方や指導方法などの課題として考えることができるため、それらを具現化していく取り組みが求められる。

### 文献

- ・ 橋本有理子・柿木志津江・小口将典・吉田初恵・津田耕一（2019）「ジェネリック・スキルに効果的な福祉系大学の諸活動と今後の課題—卒業生の職務満足度調査をもとに—」日本社会福祉学会第67回秋季大会抄録集
- ・ 吉田初恵・橋本有理子・津田耕一・小口将典・柿木志津江（2020）「福祉系大学卒業生の職場満足・仕事満足の要因分析」第10回総合福祉科学学会抄録集

## ジェネリック・スキルに効果的な福祉系大学の諸活動と教育課題

### －「実習・インターンシップ」に着目して－

○ 関西福祉科学大学 小口 将典 (5253)

橋本 有理子 (関西福祉科学大学・4381)、柿木 志津江 (関西福祉科学大学・4238)

吉田 初恵 (関西福祉科学大学・9596)、津田 耕一 (関西福祉科学大学・2231)

キーワード：福祉マインド、ジェネリック・スキル、キャリア形成

## 研究目的

就労環境の多様化といった社会状況のなかで、社会人として生き抜く力をどのようにして養成するのかという仕組みづくりは大きな課題となっている。例えば、大学などの高等教育現場においても、「若者が社会に出るまでに身につける能力」と「職場で求められる能力」が十分にマッチしていないことが課題とされるなか、学生の多様なキャリア形成の上に社会人として活躍するために必要となる社会人基礎力を養う仕組みづくりは急務となっている。

こうした背景のなかで、これまで福祉専門職の養成を行ってきた福祉系大学においては「福祉マインド」を醸成し、福祉・医療の分野に限らず、さまざまな分野からも活動できる人材養成が期待されている。2015年に公表された、日本学術会議「社会学委員会 社会福祉学分野の参照基準検討分科会」によると、福祉マインドとは「個人と社会の幸福を追求し、それらが相互に関連していることを理解し、個人の問題解決と社会の連携をどのように実現するかを俯瞰的に捉え、そのことを説明できる力」、「人間の尊厳などの価値を踏まえながら自ら社会的役割を実行するために必要な素養」（日本学術会議 2015：4-5）と説明されている。さらに戸塚らは、「サービス経済化や情報化が一層進展し、顧客や消費者、クライアントへのきめ細かな配慮・対応が企業経営の使命を制するほどの重要性をもつようになった。こうした緊要な経営課題に対して、“福祉マインド”の考え方と実践は、1つの効果的なアプローチを提供することが期待できる」（戸塚・田島・松山他 2015：21）とその可能性を述べている。

このような“福祉マインド”への期待と可能性が挙げられている一方で、福祉系大学のキャリア形成における課題について、我々は①福祉系大学の学生の多くは資格を取得し、福祉専門職としてキャリアを選択するため、職業選択や就職先は限定的であること、②福祉業界は慢性的な人材不足という社会的な背景もあり、福祉系大学の学生はそれ以外の学生よりも就職活動を積極的に行ってこなかったことである。これらから、福祉系大学のキャリア形成においては、極めて限定的な範囲となっており、「福祉マインド」を養いながら様々な分野に活かせるキャリア形成の出口支援が重要であると指摘してきた（吉田・橋本・津田・小口・柿木 2020：9）。

さらに、これまでの研究では、A大学の卒業生を対象に、職務満足度（職場満足度・仕事満足度）を高める際に効果的なジェネリック・スキル（以下、スキル）を検討した上で、学生時代の諸活動とスキルとの関係性から、学生時代に経験したほうがよい諸活動や今後の課題を検討してきた。その結果、「実習・インターンシップ」「ボランティア活動」「アルバイト」「ゼミ活動（課外活動）」「部活（サークル活動）」は、各スキルを高める上で効果的であり、卒業後のキャリアにおけるスキルとして大きな影響を及ぼしていることが示唆された（橋本・柿木・小口・吉田・津田 2019：289-299）。以上を踏まえ本報告は、社会人に必要とされる各スキルに影響を与えるとされる学生時代の「実習」の経験に着目し、「実習指導」や「現場実習」における今日的な課題とキャリア形成につながる指導方法について検討した。

## 研究方法

A 大学社会福祉学科の卒業年度別の名簿を用いて系統抽出法で抽出した卒業生 3,000 名を対象に、自記式による郵送調査を実施した。調査期間は、2018 年 11 月～2018 年 12 月である。回収数及び有効回答数は 369 通であり、回収率及び有効回答数ともに 12.7%であった（あて先不明 86 通を除く）。

調査項目のスキルについては、経済産業省（2010）、北島ら（2011）、西道（2011）を参考に計 39 項目から構成されている。また諸活動については、亀野（2016）を参考に作成されている。

## 倫理的配慮

A 大学社会福祉学科卒業生の名簿については、A 大学同窓会社会福祉学科部会に事前に研究目的・意義を説明し、質問紙を提示した上で利用の承諾を得た。

調査実施にあたり、調査対象者に回答データは厳重に管理し、すべて統計的に処理するため個人名は特定されないことや、研究目的を公表するが研究目的以外では使用しないこと、質問紙への解答・返答をもって本研究協力への同意とみなす旨を書面にて説明した。

本研究は、関西福祉科学大学研究倫理審査委員会の承認を得ており（18-17）、日本社会福祉学会研究倫理規程も遵守している。

なお、発表内容については共同研究者の承諾を得ている。

表 1 諸活動と各スキルとの関係性（全体）

スキル 諸活動（人数）	主体性	働きかけ力	実行力	課題発見力	計画力	創造力	状況把握力	柔軟性	規律性	傾聴力	発信力	ストレスコントロール力	自己省察力
ゼミ活動（課外活動）（129）	70 (54.3)	48 (37.2)	65 (50.4)	53 (41.1)	52 (40.3)	35 (27.1)	53 (41.1)	55 (43.0)	68 (52.7)	73 (57.0)	40 (31.0)	27 (20.9)	48 (37.2)
ゼミ活動（会宿や大学祭）（185）	93 (50.3)	76 (41.1)	103 (55.7)	40 (21.6)	82 (44.3)	53 (28.6)	65 (35.1)	67 (36.2)	74 (40.0)	60 (32.4)	54 (29.2)	29 (15.7)	43 (23.2)
部活（サークル）活動（207）	127 (61.4)	94 (45.4)	120 (58.0)	61 (29.5)	89 (43.0)	52 (25.1)	95 (45.9)	99 (47.8)	110 (53.1)	93 (44.9)	84 (40.6)	64 (30.9)	77 (37.2)
ひとり暮らし（91）	65 (71.4)	14 (15.4)	49 (53.8)	30 (33.0)	58 (63.7)	24 (26.4)	37 (40.7)	29 (31.9)	32 (35.2)	9 (9.9)	8 (8.8)	47 (51.6)	33 (36.3)
アルバイト（321）	208 (64.8)	152 (47.4)	197 (61.4)	105 (32.7)	110 (34.3)	64 (19.9)	199 (62.0)	177 (55.1)	235 (73.2)	142 (44.2)	75 (23.4)	120 (37.4)	126 (39.3)
ボランティア活動（174）	110 (63.2)	95 (54.6)	103 (59.2)	66 (37.9)	56 (32.2)	49 (28.2)	83 (47.7)	92 (52.9)	82 (47.1)	109 (62.6)	51 (29.3)	36 (20.7)	62 (35.6)
実習・インターンシップ（164）	108 (65.9)	66 (40.2)	102 (62.2)	104 (63.4)	81 (49.7)	48 (29.3)	99 (60.4)	83 (50.6)	103 (62.8)	107 (65.2)	44 (26.8)	51 (31.1)	92 (56.1)
就職活動（252）	147 (58.3)	75 (29.8)	150 (59.5)	92 (36.5)	120 (47.6)	31 (12.3)	95 (37.7)	65 (25.8)	94 (37.3)	62 (24.6)	83 (32.9)	55 (21.8)	119 (47.2)
大学以外での資格・免許取得（151）	86 (57.0)	24 (15.9)	87 (57.6)	42 (27.8)	65 (43.0)	16 (10.6)	31 (20.5)	25 (16.6)	33 (21.9)	24 (15.9)	10 (6.6)	18 (11.9)	39 (25.8)
旅行（224）	101 (45.1)	55 (24.6)	113 (50.4)	32 (14.3)	137 (61.2)	75 (33.5)	72 (32.1)	98 (43.8)	62 (27.7)	44 (19.6)	41 (18.3)	85 (37.9)	40 (17.9)
【参考】海外留学（11）	6 (54.5)	5 (45.5)	6 (54.5)	4 (36.4)	6 (54.5)	6 (54.5)	7 (63.6)	7 (63.6)	7 (63.6)	5 (45.5)	3 (27.3)	2 (18.2)	5 (45.5)

「実習・インターンシップ」から各スキルが得られると回答した割合が半数を超えたものは、13項目のうち8項目であった(表1)。特に「課題発見力(63.4%)」「実行力(62.2%)」「自己省察力(56.1%)」が、他の諸活動よりも関係性があると認識されていることが明らかとなった。また「主体性(65.9%)」「傾聴力(65.2%)」「規律性(62.8%)」「状況把握力(60.4%)」においても「実習・インターンシップ」との関係性があると認識している割合が高かった。一方で「働きかけ力」に対しては、「ボランティア活動」(54.6%)よりも割合は低く(40.2%)、「ストレスコントロール力」に対しても「ひとり暮らし」(51.6%)よりも割合は低かった(31.1%)。なお、「創造力」と「発信力」に関しては、他の諸活動においても回答の割合が半数を超えるものはなく、学生時代の勉強以外の活動から得られる経験のみでは高めることが難しいスキルもみられた。

## 考 察

### (1) 実習やインターンシップの有用性

卒業生たちは、学生時代に習得した技術や理論をベースに卒業後、現場実践や社会経験という体験を積み重ねながら新しい知見を取り入れつつ、自らのスキルを習熟させていく。それにつながるように大学などの高等教育では、卒業後教育も視野に入れ、専門職や社会人としての資質を自ら高めるための自己研鑽の方法が身につけられるように指導していくことが必要とされている。今回の調査結果において、複数のスキルの習得に関係性がより高いものとして、「実習やインターンシップ」が該当することが明らかとなっており、具体的な教育方法として位置づけることの有用性が示された。実習教育は、実践の場で行われていることを学び、体験・実践するだけでなく、実習指導者・実習指導教員によるスーパービジョンを通して「振り返って学ぶ」ことで、自己の成長につなげるものである。こうした、受け身ではない、体験による気づきを自己に統合する学習を重ねることが、結果として社会人基礎力としてのスキルの習得に影響を与えているといえる。

### (2) 社会人基礎力の育成を踏まえた実習教育の位置づけ

ただし、「働きかけ力」「発信力」「創造力」「ストレスコントロール力」に影響があると回答した割合が低いことから、学生時代の実習やインターンシップの経験がすべてのスキル習得を網羅するまでの影響力ではないことも今回の調査結果から示されている。しかし、これら4つのスキルの説明内容<sup>1)</sup>を見ると、他人に働きかけ巻き込む力(働きかけ力)、自分の意見をわかりやすく伝える力(発信力)、新しい価値を生み出す力(創造力)、ストレスの発生源に対応する力(ストレスコントロール力)である。これらを実習教育と対比すると、働きかけ力は実習指導において、課題などをグループで仕上げる過程のなかでリーダーやサブリーダー役を担ったり、現場実習では実習目標(課題)を達成するために学生自らが考え、それを実習指導者やクライアントに発信し、双方の協力によって達成していく一連の流れの中で身につけられるのではないかと考えられる。また、発信力は実習教育でのプレゼンテーション、創造力は現場実習での福祉専門職による社会資源の開発や創出の場面、ストレスコントロール力は実習教育の期間を通して学生自身による自己管理と、それに伴い、実習指導教員や実習指導者によるサポート場面や内容が実習教育においても存在することが考えられる。

したがって、実習教育において社会人基礎力で想定されているスキルが習得できるための場面があるにもかかわらず、卒業生自身の中での印象や関連性が乏しいのであれば、それは実習教育での学生への伝え方や指導方法などの課題として考えることができる。そして、実習教育の目標設定に社会人基礎力などの素養を高めることが設定されれば、実習教育を通じた社会人基礎力のスキル習得に寄与できるのでは

ないだろうか。それを具体化させるためには、在学中の学生に対して、実習教育にそれらのスキルを伸ばす機会があることを伝え、実際に取り組むことでのスキル習得に対する評価方法の確立が必要といえる。

### 今後の研究に向けて

本研究における調査結果では、諸活動と各スキルとの関係性が卒業生自身の自己評価によるものであるため、具体的な項目間の関連性については言及できていないことが課題である。また、A大学の卒業生を対象とした調査であるため、結果においても限定的である。今後は卒業生・在学生からのインタビュー調査から、今回の調査で把握できなかった学生時代の諸活動によって得られた経験が各スキルの習得にどのような影響を与えるのかについて明らかにすることを進めていく予定である。

1) 経済産業省（2018）「人生 100 年時代の社会人基礎力について」

### 文献

- ・ 亀野淳（2016）「大学入学時のジェネリック・スキルを規定する要因分析：北海道大学 1 年生に対する調査をもとに」高等教育ジャーナル：高等教育と生涯学習 23、71-78
- ・ 経済産業省（2010）「社会人基礎力養成の手引き」
- ・ 北島洋子他（2011）「看護系大学生の社会人基礎力の構成要素と属性による相違の検討」大阪府立大学看護学部紀要 17（1）、13-23
- ・ 戸塚法子・田島博実・松山恵美子他（2015）「『福祉マインド』を活かしたキャリア教育を“創る”－社会福祉学科におけるキャリア教育の試み－」淑徳大学高等教育研究開発センター年報 2、13-29
- ・ 橋本有理子・柿木志津江・小口将典・吉田初恵・津田耕一（2019）「ジェネリック・スキルに効果的な福祉系大学の諸活動と今後の課題－卒業生の職務満足度調査をもとに－」日本社会福祉学会第 67 回秋季大会 抄録集
- ・ 西道実（2011）「社会人基礎力の測定に関する尺度構成の試み」プール学院大学研究紀要 51、217-228
- ・ 日本学術会議 社会学委員会 社会福祉学分野の参照基準検討分科会（2015）「大学教育の分野別質保証のための教育課程編成上の参照基準 社会福祉学分野」
- ・ 吉田初恵・橋本有理子・津田耕一・小口将典・柿木志津江（2020）「福祉系大学卒業生の職場満足・仕事満足の要因分析」第 10 回総合福祉科学学会 抄録集

### 付記

本研究は、2018 年度関西福祉科学大学「社会福祉の魅力発信プロジェクト事業」助成による研究成果の一部である。